絵本の春

泉鏡花

もとの邸町の、荒果てた土塀が今もそのままになっている。……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの――山国で――石のごつごつした狭い小路が、霞みながら一条煙のように、ぼっと黄昏れて行く。

弥生の末から、ちっとずつの遅速はあっても、花は一時に咲くので、その一ならびの塀の内に、桃、紅梅、椿も桜も、あるいは満開に、あるいは初々しい花に、色香を装っている。石垣の草には、蕗の薹も萌えていよう。特に桃の花を真先に挙げたのは、むかしこの一廓は桃の組といった組屋敷だった、と聞くからである。その樹の名木も、まだそっちこちに残っていて麗に

咲いたのが……こう目に見えるようで、それがまたいかにも寂しい。

二条ばかりも重(かさな)って、美しい婦(おんな)の虐(しいた)げられた——旧藩の頃にはどこでもあり来(きた)りだが——伝説があるからで。

通道(とおりみち)というでもなし、花はこの近処(きんじょ)に名所さえあるから、わざとこんな裏小路を捜(さぐ)るものはない。日中(ひなか)もほとんど人通りはない。妙齢(としごろ)の娘でも見えようものなら、白昼といえども、それは崩れた土塀から影を顕(あら)わしたと、人を驚かすであろう。

その癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所

の山へ、絡繹（らくえき）として、花見、遊山に出掛けるのが、この前通りの、優しい大川の小橋を渡って、ぞろぞろと帰って来る、男は膚脱（はだぬ）ぎになって、手をぐたりとのめり、女が媚（なまめ）かしい友染（ゆうぜん）の褄端折（つまばしょり）で、啣楊枝（くわえようじ）をした酔払（よっぱらい）まじりの、浮かれ浮かれた人数が、前後に揃って、この小路をぞろぞろ通るように思われる……まだその上に、小橋を渡る跫音（あしおと）が、左右の土塀へ、そこを蹈（ふ）むように、とろとろと響いて、しかもそれが手に取るように聞こえるのである。

――このお話をすると、いまでも私は、まざまざとその景色が目に浮ぶ。――

ところで、いま言った古小路は、私の家から十町余りも離れていて、縁で視めても、二階から伸上っても、それに……地方の事だから、板葺屋根へ上って眴しても、実は建連った賑な町家に隔てられて、その方角には、橋はもとよりの事、川の流も見えないし、小路などは、たとい見えても、松杉の立木一本にもかくれてしまう。……第一見えそうな位置でもないのに——いま言った黄昏になる頃は、いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山ばかりか、我が家の町も、門も、欄干も、襖も、居る畳も、ああ我が影も、朦朧と見えなくなって、国中、町中にただ一条、その桃の古

小路ばかりが、漫々として波の静な蒼海に、船脚を曳いたように見える。見えつつ、面白そうな花見がえりが、ぞろぞろ橋を渡る跫音が、約束通り、とととと、どど、ごろごろと、且つ乱れてそこへ響く。……幽に人声——女らしいのも、ほほほ、と聞こえると、緋桃がぱッと色に乱れて、夕暮の桜もはらはらと散りかかる。

……

直接に、そぞろにそこへ行き、小路へ入ると、寂しがって、気味を悪がって、誰も通らぬ、更に人影はないのであった。

気勢はしつつ、……橋を渡る音も、隔って、聞こえはしない。……

桃も桜も、真紅な椿も、濃い霞に包まれた、朧も暗いほどの土塀の一処に、石垣を攀上るかと附着いて、……つつじ、藤にはまだ早い、——荒庭の中を覗いている——絣の筒袖を着た、頭の円い小柄な小僧の十余りなのがぽつんと見える。

そいつは、……私だ。

夢中でぽかんとしているから、もう、とっぷり日が暮れて塀越の花の梢に、朧月のやや斜なのが、湯上

りのように、薄くほんのりとして覗くのも、そいつは知らないいらしい。

ちょうど吹倒れた雨戸を一枚、拾って立掛けたような破れた木戸が、裂めだらけに閉してある。そこを覗いているのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどった白紙で、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染めた、それがほのかに読まれる——紙が樹の隈を分けた月の影なら、字もただ花と蕾を持った、桃の一枝であろうも知れないのである。

そこへ……小路の奥の、森の覆った中から、葉をざわざわと鳴らすばかり、脊の高い、色の真白な、大柄

な婦（おんな）が、横町の湯の帰途（かえり）と見える、……化粧道具と、手拭（てぬぐい）を絞ったのを手にして、陽気はこれだし、のぼせもした、……微酔（ほろよい）もそのままで、ふらふらと花をみまわしつつ近づいた。

　巣から落ちた木菟（みみずく）の雛（ひよ）ッ子のような小僧に対して、一種の大なる化鳥（けちょう）である。大女の、わけて櫛巻（くしまき）に無雑作に引束（ひったば）ねた黒髪の房々とした濡色と、色の白さは目覚ましい。

「おやおや……新坊。」

　小僧はやっぱり夢中でいた。

「おい、新坊。」

と、手拭で頰辺（ほっぺた）を、つるりと撫（な）でる。

「あッ。」

と、肝を消して、

「まあ、小母（おば）さん。」

ベソを掻（か）いて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。父（おとっ）さんに言っては可厭（いや）だよ。」

と、あわれみを乞いつつ言った。

不気味に凄（すご）い、魔の小路だというのに、婦（おんな）が一人で、湯帰りの捷径（ちかみち）を怪（あやし）んでは不可（いけな）い。……実はこの小母さんだから通ったのである。

つい、（乙）の字なりに畝（うね）った小路の、大川へ出口の小さな二階家に、独身で住（すま）って、門（かど）に周易の看板を出している、小母さんが既に魔に近い。婦（おんな）で卜筮（うらない）をするのが怪しいのではない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知っている。大女の小母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の真夜中に蘇生（よみがえ）った。その時分から酒を飲んだから酔って転寝（うたたね）でもした気でいたろう。力はあるし、棺桶（かんおけ）をめりめりと鳴らした。それが高島田だったというからなお稀有（けぶ）である。地獄も見て来たよ——極楽は、お手のものだ、と卜筮（うらない）ごときは掌（たなごころ）である。且つ寺子屋仕

込みで、本が読める。五経、文選（もんぜん）すらすらで、書がまた好（よ）い。一度冥途（めいど）を徜徉（さまよ）ってからは、仏教に親（したし）んで参禅もしたと聞く。——小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手習傍輩（てならいほうばい）で、そう毎々でもないが、時々は往来（ゆきき）をする。何ぞの用で、小僧も使いに遣（や）られて、煎餅（せんべい）も貰（もら）えば、小母さんの易をト（み）る七星を刺繍（ししゅう）した黒い幕を張った部屋も知っている、その往戻（ゆきもど）りから、フトこのかくれた小路をも覚えたのであった。

　この魔のような小母さんが、出口に控えているから、怪（あやし）い可恐（おそろし）いものが顕（あら）われようとも、それが、小母さんのお夥間（なかま）の気がするために、何となく心易（こころやす）くって、い

つの間にか、小児の癖に、場所柄を、さして憚らないでいたのである。が、学校をなまけて、不思議な木戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父親の傍輩に見つかったのは、天狗に逢ったほど可恐しい。

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく背を押したのだけれども、小僧には襟首を抓んで引立てられる気がして、手足をすくめて、宙を歩行いた。

「肥っていても、湯ざめがするよ。――もう春だがなあ、夜はまだ寒い。」

と、納戸で被布を着て、朱の長煙管を片手に、

「新坊、――あんな処に、一人で何をしていた?……小母さんが易を立てて見てあげよう。二階へおいで。」

月、星を左右の幕に、祭壇を背にして、詩経、史記、二十一史、十三経注疏(ちゅうそ)なんど本箱がずらりと並んだ、手習机を前に、ずしりと一杯に、座蒲団(ざぶとん)に坐(すわ)って、蔽(おい)のかかった火桶を引寄せ、顔を見て、ふとった頬でニタニタと笑いながら、長閑(のどか)に煙草(たばこ)を吸ったあとで、円い肘(ひじ)を白くついて、あの天眼鏡というのを取って、ぴたりと額に当てられた時は、小僧は悚然(ぞっ)として震上(ふるいあが)った。

大川の瀬がさっと聞こえて、片側町の、岸の松並木

に風が渡った。
「……かし本。――ろくでもない事を覚えて、此奴めが。こんな変な場処まで捜しまわるようでは、あすこ、ここ、町の本屋をあら方あらしたに違いない。道理こそ、お父さんが大層な心配だ。……新坊、小母さんの膝の傍へ。――気をはっきりとしないか。ええ、あんな裏土塀の壊れ木戸に、かしほんの貼札だ。……そんなものがあるものかよ。いまも現に、小母さんが、おや、新坊、何をしている、としばらく熟と視ていたが、そんなはり紙は気も影もなかったよ。――何だとえ？……昼間来て見ると何にもない。……日の暮から、夜

へ掛けてよく見えると。――それ、それ、それ見な、これ、新坊。坊が立っていた、あの土塀の中は、もう家（うち）が壊れて草ばかりだ、誰も居ないんだ。荒庭に古い祠（ほこら）が一つだけ残っている……」

と言いかけて、ふと独（ひとり）で頷（うなず）いた。

「こいつ、学校で、勉強盛りに、親がわるいと言うのを聞かずに、夢中になって、余り凝るから魔が魅（さ）した。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新坊や、可恐（こわ）い処だ、あすこは可恐い処だよ。――聞きな。――おそろしくなって帰れなかったら、可（よ）い、可い、小母さんが、町の坂まで、この川土手を

送ってやろう。

——旧藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がった侍が居てな、御主人の難病は、巳巳巳巳(みみみみ)、巳の年月の揃った若い女の生肝(いきぎも)で治ると言って、——よくある事さ。いずれ、主人の方から、内証で入費は出たろうが、金子(かね)にあかして、その頃の事だから、人買の手から、その年月の揃ったという若い女を手に入れた。あろう事か、俎(まないた)はなかろうよ。雨戸に、その女を赤裸(はだか)で鎹(かすがい)で打ったとな。……これこれ、まあ、聞きな。……真白(まっしろ)な腹をずぶずぶと刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛けた戸は、その雨戸かも知れないよ。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであった。

「酷(むご)たらしい話をするとお思いでない。――聞きな。
さてとよ……生肝を取って、壺(つぼ)に入れて、組屋敷の陪臣(ばいしん)は、行水、嗽(うがい)に、身を潔(きよ)め、麻上下(あさがみしも)で、主人の邸へ持って行く。お傍医師(そばいしゃ)が心得て、……これだけの薬だもの、念のため、生肝を、生(しょう)のもので見せてからと、御前(ごぜん)で壺を開けるとな。……血肝(ちぎも)と思った真赤(まっか)なのが、糠袋(ぬかぶくろ)よ、なあ。麝香入(じゃこういり)の匂袋ででもある事か――坊は知るまい、女の膚身(はだみ)を湯で磨く……気取ったのは鶯(うぐいす)のふんが入る、糠袋が、それでも、殊勝に、思わ

せぶりに、びしょびしょぶよぶよと濡れて出た。いずれ、身勝手な——病（やまい）のために、女の生肝を取ろうとするような殿様だもの……またものは、帰って、腹を割（さ）いた婦（おんな）の死体をあらためる隙（ひま）もなしに、やあ、血みどれになって、まだ動いていまする、とおのが手足を、ばたばたと遣りながら、お目通（めどおり）、庭前（にわさき）で斬（き）られたのさ。いまの祠（ほこら）は……だけれど、その以前からあったというが、そのあとの邸だよ。もっとも、幾たびも代は替った。

——余りな話と思おうけれど、昔ばかりではないのだよ。現に、小母さんが覚えた、……ここへ一昨年（おととし）越

して来た当座、――夏の、しらしらあけの事だ。――あの土塀の処に人だかりがあって、がやがや騒ぐので行ってみた。若い男が倒れていてな、……川向うの新地帰りで、――小母さんもちょっと見知っている、ちとたりないほどの色男なんだ――それが……医師も駆附けて、身体を検べると、あんぐり開けた、口一杯に、紅絹の糠袋……」

「……………」

「糠袋を頬張って、それが咽喉に詰って、息が塞って死んだのだ。どうやら手が届いて息を吹いたが。……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美しいお嬢さ

んの、湯上りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の真似だか知らないが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ぺろりとその真紅な舌。小僧は太い白蛇に、頭から舐められた。

「その舌だと思ったのが、咽喉へつかえて気絶をしたんだ。……舌だと思ったのが、糠袋。」

とまた、ぺろりと見せた。

「厭だ、小母さん。」

「大丈夫、私がついているんだもの。」

「そうじゃない。……小母さん、僕もね、あすこで、

きれいなお嬢さんに本を借りたの。」

「あ。」

と円い膝に、揉(も)み込むばかり手を据えた。

「もう、見たかい。……ええ、高島田で、紫色の衣(き)ものを着た、美しい、気高い……十八九の。……ああ、悪戯(いたずら)をするよ。」

と言った。小母さんは、そのおばけを、魔を、鬼を、——ああ、悪戯をするよ、と独言(ひとりごと)して、その時はじめて真顔になった。

　私は今でも現(うつつ)ながら不思議に思う。昼は見えない。

逢魔が時からは朧にもあらずして解る。が、夜の裏木戸は小児心にも遠慮される。……かし本の紙ばかり、三日五日続けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所から帰ったらしく、背へ来て、手をとって、荒れた寂しい庭を誘って、その祠の扉を開けて、燈明の影に、絵で知った鎧びつのような一具の中から、一冊の草双紙を。……

「――絵解をしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉などの、話して聞かせるのを絵解と言った。）――読めますか、仮名ばかり。」

「はい、読めます。」

「いい、お児（こ）ね。」

きつね格子に、その半身、やがて、﨟（ろう）たけた顔が覗（のぞ）いて、見送って消えた。

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、階子段（はしごだん）を、父に見せまいと、駆上る時に、——帰ったかと、声がかかって、ハッと思う、……懐中（ふところ）に、どうしたか失（う）せて見えなくなった。ただ、内へ帰るのを待兼ねて、大通りの露店の灯影（ともしび）に、歩行（ある）きながら、ちらちらと見た、絵と、かながきの処は、——ここで小母さんの話した、——後のでない、前の巳巳巳の話であっ

た。

私は今でも、不思議に思う。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたように目に映る。……

大正…年…月の中旬、大雨（たいう）の日の午（うま）の時頃から、その大川に洪水した。——水が軟（やわらか）に綺麗で、流（ながれ）が優しく、瀬も荒れないというので、——昔の人の心であろう——名の上へ女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七月七日、大雨の降続いたその七日七晩め

に、町のもう一つの大河が可恐い洪水した。七の数が累なって、人死も夥多しかった。伝説じみるが事実である。が、その時さえこの川は、常夏の花に紅の口を漱がせ、柳の影は黒髪を解かしたのであったに——

もっとも、話の中の川堤の松並木が、やがて柳になって、町の目貫へ続く処に、木造の大橋があったのを、この年、石に架かえた。工事七分という処で、橋杭が鼻の穴のようになったため水を驚かしたのであろうも知れない。

僥倖に、白昼の出水だったから、男女に死人はない。二階家はそのままで、辛うじて凌いだが、平屋はほと

んど濁流の瀬に洗われた。

　若い時から、諸所を漂泊（さすら）った果（はて）に、その頃、やっと落着いて、川の裏小路に二階借（がり）した小僧の叔母（おば）にあたる年寄（としより）がある。

　水の出盛った二時半頃、裏向（むき）の二階の肱掛窓（ひじかけまど）を開けて、立ちもやらず、坐りもあえず、あの峰へ、と山に向って、膝（ひざ）を宙に水を見ると、肱の下なる、廂屋根（ひさしやね）の屋根板は、鱗（うろこ）のように戦（おのの）いて、——北国の習慣（ならわし）に、圧（おし）にのせた石の数々はわずかに水を出た磧（かわら）であった。

　つい目の前を、ああ、島田髷（しまだまげ）が流れる……緋鹿子（ひがのこ）の切（きれ）が解けて浮いて、トちらりと見たのは、一条（ひとすじ）の真赤（まっか）

な蛇。手箱ほど部の重（かさな）った、表紙に彩色絵（さいしきえ）の草紙を巻いて――鼓の転がるように流れたのが、たちまち、紅（べに）の雫（しずく）を挙げて、その並木の松の、就中（なかんずく）、山より高い、二三尺水を出た幹を、ひらひらと昇って、声するばかり、水に咽（むせ）んだ葉に隠れた。――瞬く間である。

――

　そこら、屋敷小路の、荒廃離落した低い崩土塀（くずれどべい）には、おおよそ何百年来、いかばかりの蛇が巣くっていたろう。蝮（まむし）が多くて、水に浸った軒々では、その害を被ったものが少くない。

高台の職人の屈竟なのが、二人ずれ、翌日、水の引際を、炎天の下に、大川添を見物して、流の末一里有余、海へ出て、暑さに泳いだ豪傑がある。

荒海の磯端で、肩を合わせて一息した時、息苦しいほど蒸暑いのに、颯と風の通る音がして、思わず脊筋も悚然とした。……振返ると、白浜一面、早や乾いた蒸気の裡に、透なく打った細い杭と見るばかり、幾百条とも知れない、おなじような蛇が、おなじような状して、おなじように、揃って一尺ほどずつ、砂の中から鎌首を擡げて、一斉に空を仰いだのであった。その畝る時、歯か、鱗か、コツ、コツ、コツ、カタカタカ

タと鳴って響いた。――洪水に巻かれて落ちつつ、はじめて柔(やわらか)い地を知って、砂を穿(うが)って活(い)きたのであろう。

きやツ、と云うと、島が真中(まんなか)から裂けたように、二人の身体(からだ)は、浜へも返さず、浪打際(なみうちぎわ)をただ礫(つぶて)のように左右へ飛んで、裸身(はだか)で逃げた。

大正十五（一九二六）年一月

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年5月23日第1刷発行
入力：本山智子
校正：門田裕志
2001年6月25日公開
2005年9月26日修正
青空文庫ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。